

きっき / KIKKI

プレミアム
ギフトバコ

Bコース



JINOMON
もん (ま) じの
MADE IN FURUSATO

山中塗

このカタログでは、
5つの商品の中から
お選びいただけます。

商品番号 | 7021



マグ／ときはピンク

子どもが使いやすいよう設計したマグカップ。やや末広がりの形状で倒れにくく、しっかりとした厚みのある取手は、子どものちいさな手でも安定して持つことができます。トキの風切羽にちなんだ日本の伝統色「鴛羽色(ときはいろ)」の、オリジナル色漆を使用した拭き漆仕上げです。

セット内容／マグ(直径約59mm×高さ約74mm※取手含まず／容量150ml／天然木・拭き漆)

商品番号 | 7022



マグ／ウルシ

子どもが使いやすいよう設計したマグカップ。やや末広がりの形状で倒れにくく、しっかりとした厚みのある取手は、子どものちいさな手でも安定して持つことができます。顔料を入れない漆本来の色。深みのあるブラウンの奥に、木目が透けて見える拭き漆仕上げです。

セット内容／マグ(直径約59mm×高さ約74mm※取手含まず／容量150ml／天然木・拭き漆)

商品番号 | 7023



プレート・スプーンセット／ナチュラル

子どもが手づかみで食べやすいよう深みを持たせたプレートと、子どもの口に合わせたサイズで離乳食を食べさせやすい形状のスプーンのセット。食品衛生基準を満たしたウレタン塗料により、変色などを防ぎます。山中塗の特長である美しい木目と天然木のナチュラルカラーが楽しめます。

セット内容／プレート(直径約113mm／天然木・ウレタン塗装)、スプーン(長さ約122mm／天然木・ウレタン塗装)

商品番号 | 7024



プレート・スプーンセット／ときはピンク

子どもが手づかみで食べやすいよう深みを持たせたプレートと、子どもの口に合わせたサイズで離乳食を食べさせやすい形状のスプーンのセット。トキの風切羽にちなんだ日本の伝統色「鴛羽色(ときはいろ)」のオリジナル色漆を使用し、拭き漆の技法で仕上げられています。

セット内容／プレート(直径約113mm／天然木・拭き漆)、スプーン(長さ約122mm／天然木・拭き漆)

商品番号 | 7025



プレート・スプーンセット／ウルシ

子どもが手づかみで食べやすいよう深みを持たせたプレートと、子どもの口に合わせたサイズで離乳食を食べさせやすい形状のスプーンのセット。深いブラウンは、顔料を入れない漆本来の色。漆を塗っては拭き取る「拭き漆」の技法により、木目が透けた風合いに仕上がっています。

セット内容／プレート(直径約113mm／天然木・拭き漆)、スプーン(長さ約122mm／天然木・拭き漆)

What's

— KIKKIとは —

1. 伝統工芸・山中塗の子ども食器ブランド
2. 「子どもが自分で食べる」「大人が食べさせる」場面を考慮した設計
3. 大人になっても使いつづけたくなるデザイン



伝統技術を通じて伝える、格式だけではない豊かさ。
暮らしに寄り添う「日常使いの器」を届ける漆器店

1909年創業の山中塗の工房。高度な伝統技術を現代に伝える担い手として、生活に漆器の楽しさを気軽に取り入れる「普段着の器」を提案しています。「きれいな形のものはいじりやすい」という信念のもとで制作される器は、過去12回グッドデザイン賞を受賞。

漆工房大島

石川県加賀市山中温泉東桂木町ヌ-2-10

TEL 0761-78-1635

[Instagram] totaro_oshima

Here!



離乳食に山中塗を。 子育てに寄り添う木の器

加賀市・山中温泉地区で400年にわたり受け継がれてきた伝統工芸「山中塗」。独自の技法を守りながら、現代的な表現にも積極的に取り組む山中漆器の産地として知られています。

そんな山中塗で、離乳食から使える食器をつくるのが『KIKKI』。赤ちゃんに漆器？不思議な組み合わせにも感じてしまいます。しかし『KIKKI』代表でプロダクトデザイナーの内藤真帆さんは「漆器は子どもにこそ使ってほしい」と話します。

「木製の漆器は軽く、手触りが柔らかく、器が熱くなりにくい。ちいさな子どもにとって良いところがたくさんあるんです」。

子どもの口に入るものだから、素材にもこだわりたい。そんな人にも「木と漆」というナチュラル素材は安心感を与えてくれます。一児の母でもある内藤さんだからこその視点で、子育てをする人の気持ちに寄り添った製品です。

1ミリ単位で設計される 美しさと使いやすさの両立

内藤さんと山中塗との出会いは、大学卒業後に勤めたデザイン事務所『柳工業デザイン研究会』の仕事でした。同法人の設立者で製品デザインの巨匠・柳宗理が生前に手がけた漆碗を復刻するプロジェクトで、山中塗の老舗『漆工房大島』に制作を依頼したのがきっかけでした。その縁が、のちに『KIKKI』の制作に繋がります。



『KIKKI』の器は「子どもが自分で食べる」「大人が子どもに食べさせる」という場面を想定して作られています。小さな手や口、どろっとした離乳食。デジタルでの設計が主流の時代において、あえて模型を作り、実際の使い心地を試しながらデザインを固めていきます。これは、使いやすさと美しさの両立を志向した柳宗理が貫き通したという設計プロセス。巨匠の哲学は、内藤さんの制作の芯の部分にたしかに受け継がれています。

そして、その熱意を丁寧に形にしていっただのが『漆工房大島』の大島社長。「ほんとうに頼もしい存在」と内藤さんは言います。

たとえばプレート。子どもが手づかみで食べやすいよう内側のカーブを深めの設計にしてある一方、外側は手に馴染むやわらかなカーブ。内側と外側で異なる曲面を持つ複雑な構造です。

「このデザインを再現するには『大島』さんの精巧な技術が不可欠でした。手彫りなのに個体ごとの形状にばらつきがなく、きれいにスタッキングできるのもすごい」と内藤さんは話します。

山中塗は、漆を塗る前の「木地」の歴史が古く、国内屈指の技術で知られています。さらに、その美しい木目を生かす「塗り」にもまた「拭き漆」という独自の手法が。漆を塗っては拭き取ることで、艶やかな質感の奥に木目を透かして見せるこの技法は、『KIKKI』の器にも採用されています。

器の色は3種類。無着色で漆そのままの色の「ウルシ」、食品安全基準を満たしたウレタンでクリア塗装し、木の風合いが楽しめる「ナチュラル」、そして、オリジナルカラーの漆を使用した「ときはピンク」です。子どもに似合い、食卓になじむ色を追求するなかで出会ったという日本の伝統色「ときはいろ」。「キュービッドピンク」とも呼ばれるこの色に運命を感じ、絵の具でサンプルを自作。漆で再現してもらったのだそうです。伝統と現代性が融合する山中塗だからこそ実現した、品の良さと軽やかさを兼ね備えた色合いです。

「『KIKKI』だけでなく、山中塗のものがもっと知られてほしい」と、内藤さんは願っています。



大人になっても長く使える『KIKKI』の器。小ぶりなプレートにはデザートに乗せると可愛い。スプーンもデザートにちょうどいいサイズ。飾らないシンプルデザインだからこそ、どんなものを盛り付けてもよく似合いそうです。



上／プレートは精緻な技術により、ぴったりと重ねることができます。中／漆を塗る前の「木地」づくりの様子。木材をろくろで回しながら削るのが山中塗の特徴です。下／漆は乾燥後に拭き上げられ、さらに漆が塗り重ねられます。透明感のあるツヤが美しく、堅牢な仕上がりに。

“大人になっても使える器”に 成長への願いを込めて

「実家に帰ると、私が子どもの頃に使っていた漆器がなにげなく食卓に出てくるときがあります。いいものだなあとしみじみ感じます」という内藤さん。器は、日常の中で繰り返し使うもの。だからこそ、それを通じて懐かしい空気がふと思い出されるのかもしれない。

そんな内藤さんの感性を反映するように、『KIKKI』のもののづくりには「長く使えるものを」という一貫したコンセプトがあります。

離乳食期を過ぎ、やがて大人になっても使える器を届けたい。愛らしくも決して子供っぽすぎない色や形には、そうした思いが込められています。

漆は、使うほどにつやが増し、深みが出るのが特長の素材。また、漆器には塗り直しをしながら大切に使いつづける文化があり、多くの工房ではそうした修理を受け付けているのだそうです。ひょっとしたら『KIKKI』の器が、赤ちゃんにとってはじめての「一生もの」になるかもしれません。

大きくなったこの子は、この器をどんなふうにするのかしら。そんな想像が膨らむ、成長への願いが込められた贈り物です。



ないとう まほ
内藤 真帆さん

プロダクトデザイナー。蒔絵師の父を持ち、幼いころから美術や工芸に親しむ。金沢美術工芸大学を卒業後、柳宗理が設立した『柳工業デザイン研究会』に入職。現在は、デザインスタジオ kumano でアシスタントを務める一方、自身のオリジナルデザイン制作にも取り組んでいる。
[Instagram] kikki.tableware